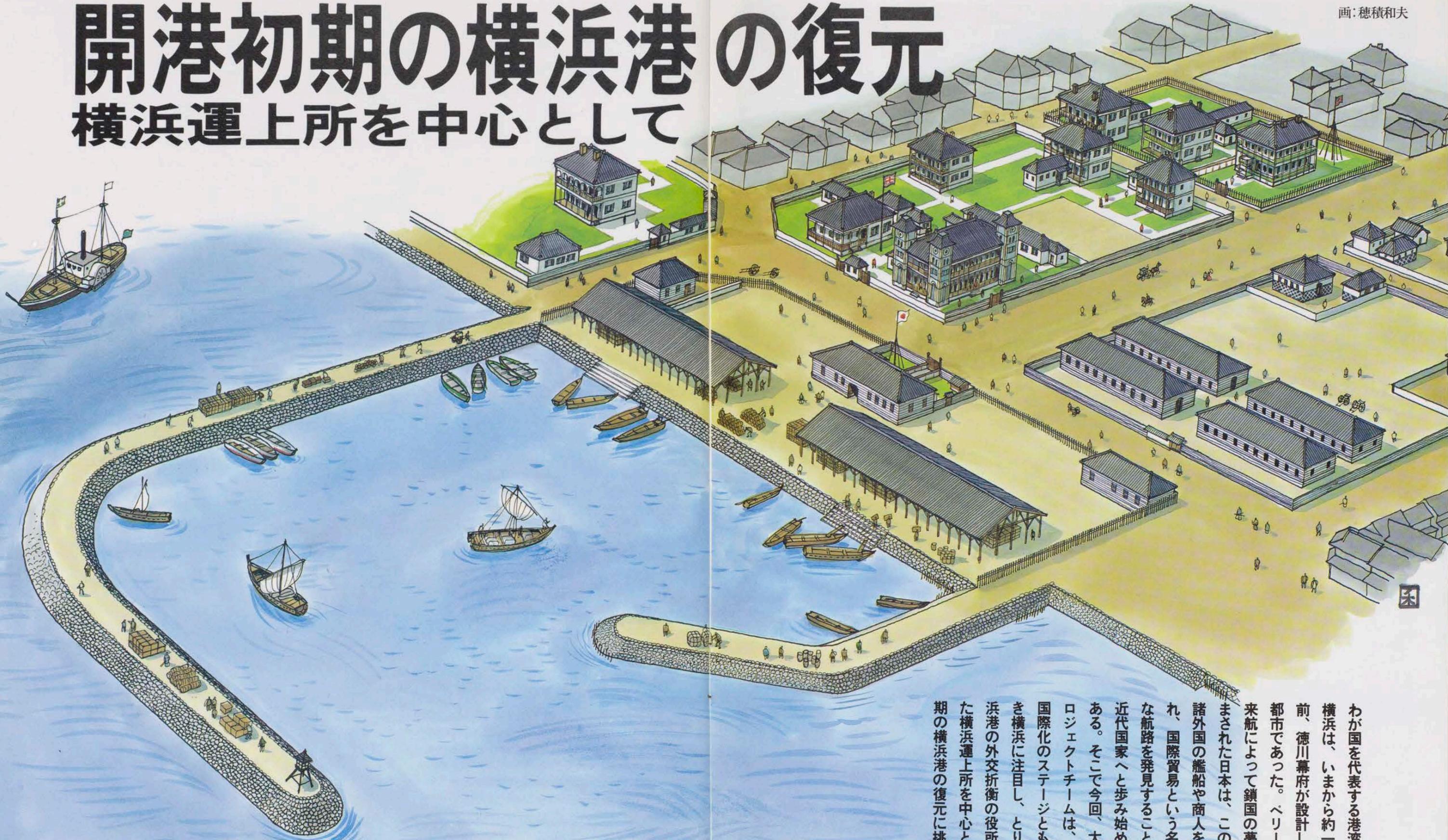


開港初期の横浜港の復元

横浜運上所を中心として

画：穂積和夫



わが国を代表する港湾都市・横浜は、いまから約一三〇年前、徳川幕府が設計した計画都市であった。ペリーの浦賀来航によって鎖国の夢から覚まされた日本は、この横浜に諸外国の艦船や商人を迎え入れ、国際貿易という名の新たな航路を発見することにより、近代国家へと歩み始めたのである。そこで今回、大林組プロジェクトチームは、日本の国際化のステージともいうべき横浜に注目し、とりわけ横浜港の外交折衝の役所であった横浜運上所を中心とした初期の横浜港の復元に挑戦した。

(1) 港町・横浜の形成

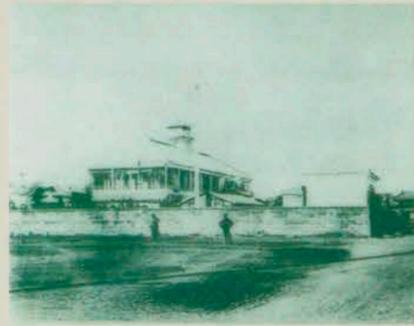
◆横浜開港前夜

ペリーの率いる四隻の黒船が浦賀沖に来航したのは、一八五三年（嘉永六年）のことであった。その時の衝撃の強さは、翌年に早くも二〇〇年の鎖国を解き、日米及び日英和親条約が締結されたことから窺い知ることが出来る。さらに一八五八年には、アメリカの駐日総領事ハリスとの間に日米修好通商条約が結ばれた。こうして神奈川、函館、新潟、兵庫、長崎の五港が、諸外国との交易の場となる「開港場」に決定したのである。

徳川幕府の外交政策の根幹であった鎖国が、これほど早急に解かれた背景には、当時の幕府の開国派ともいえるべき海防掛の目付たちの活躍があった。その中心的存在であった岩瀬忠義は、日米修好通商条約を締結した際の全権委員であり、ハリス提案の中にはなかった神奈川を開港場の候補地に挙げたのは彼だといわれている。国内における商取引が大阪中心であったのに対し、外国との貿易を開く際には江戸にその利潤を吸収しようという意図があった。つまり、かなり早い時点で、開国のみならず交易による国家づくりに着眼していたのである。

岩瀬を始めとした海防掛の目付には、老中阿部正弘の人材登用策のおかげで若き開国論者たちの逸材が集まっていた。彼らは黒船の来航に接し、すぐに国際情勢の変化を察知した。また、隣国の清が、イギリスなど諸外国の植民地政策の犠牲となった事情にも注目していた。さらに、来日した諸外国要人との接触から、開国が日本にとって不可欠であり、貿易が今後、日本の繁栄の基礎となるであろうことを知った。そのために、阿部老中のもとで、造船計画や、船舶・貨物への課税などの開国政策を次々と進めていった。

「The Far East」より/東京大学総合図書館所蔵



①横浜役所 慶応3年



②米国領事館 明治2年



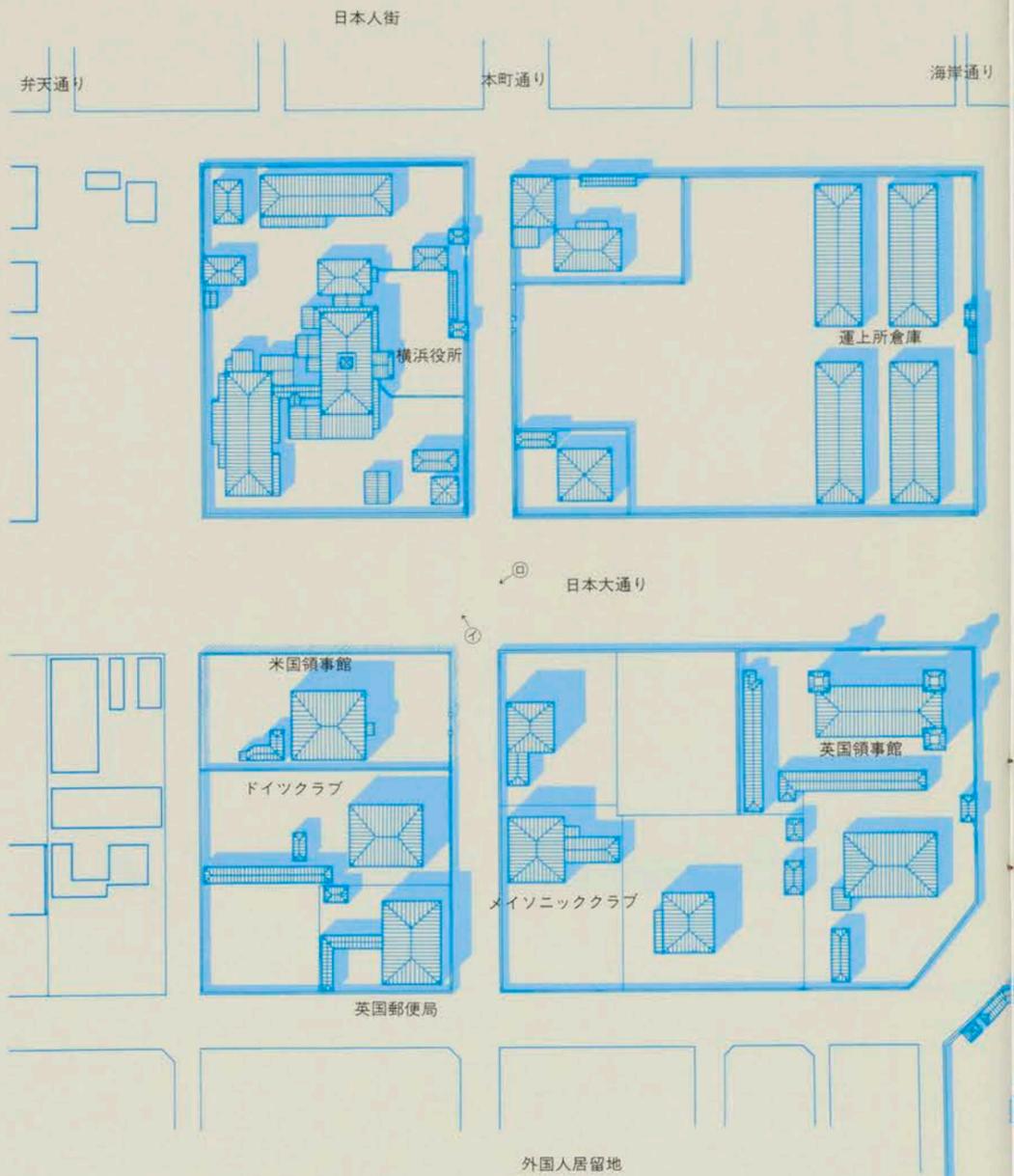
③英国領事館 明治元年

●横浜開港関連年表

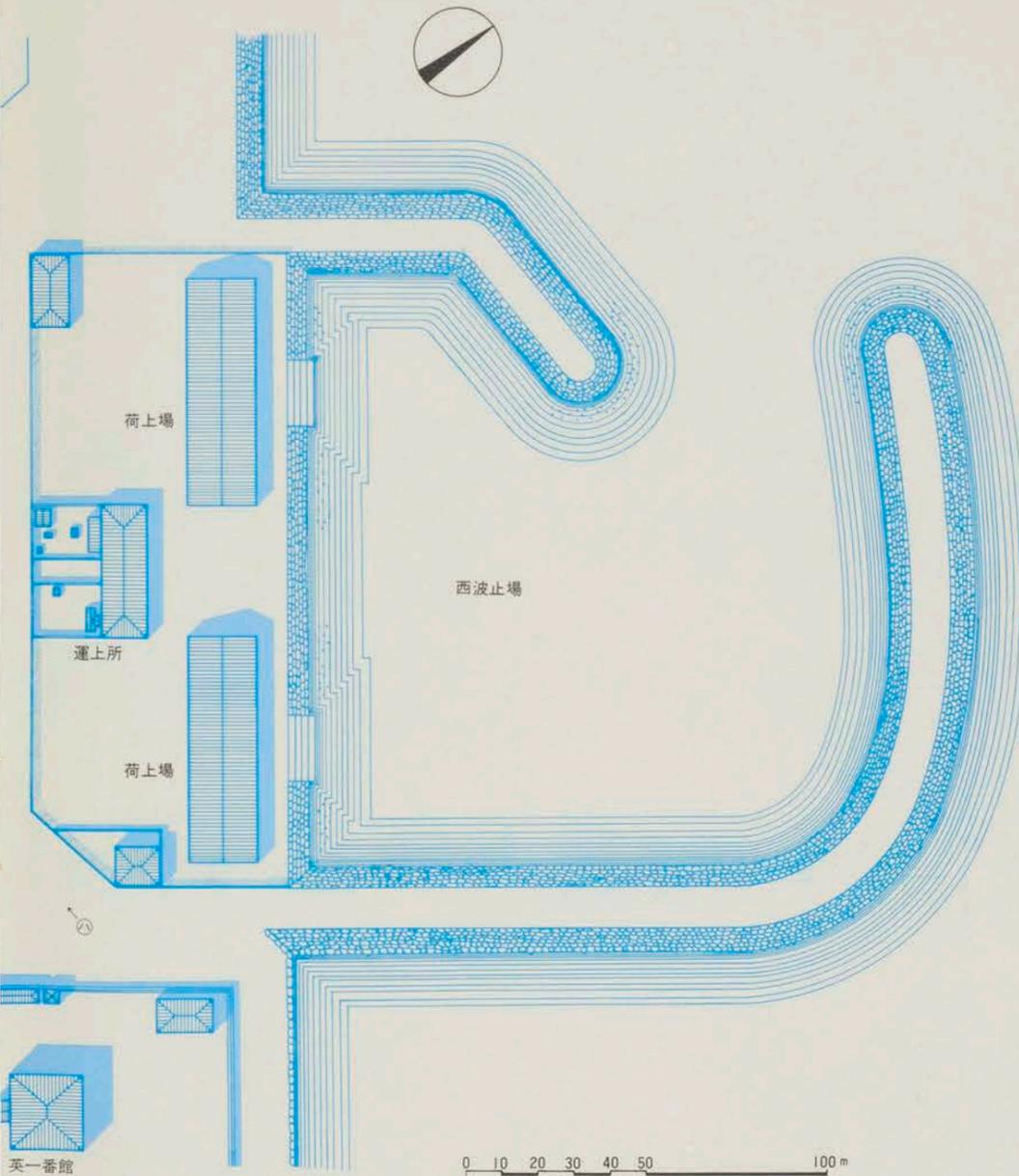
- 1853(嘉永6) ペリー浦賀に来航
- 1854(安政1) 日米、日英和親条約調印
- 1858(安政5) 日米修好通商条約調印
西波止場建設
安政の大獄
- 1859(安政6) 横浜開港
横浜運上所(第1次)開設
横浜道(神奈川～戸部間)建設
- 1860(万延1) 外国人居留地東側に堀川を掘削
桜田門外の変
- 1862(文久2) 生麦事件
- 1864(元治1) 東波止場建設
- 1866(慶応2) 豚屋火事で関内の大半が焼失
第3回地所規則により横浜の
都市計画が定まる
洋風建築による横浜運上所開設
- 1867(明治1) 王政復古

●創建時運上所の役職

- 御書簡掛 各国領事の往復の文書及び応接筆記等に関する事務。
- 御金掛 諸収入金の出納、経費の支出及び洋銀引換等に関する事務。
- 居留地掛 外国人居住の地所賃与及び借地料徴収等に関する事務。
- 訴訟掛 内外交渉、民事訴訟に関する事務。
- 普請掛 各土木営繕に関する事務、常設と臨時の区別がある。
- 御用掛 備品及び消耗品の購買、交付に関する事務。
- 月番掛 公文の接受及び他の係に属さない一切の事務。
- 帳面掛 輸出入税金の調査、記簿及び輸出入品統計に関する事務。
- 引合掛 輸出入税金の収入及び諸般外国人に接待する事務。
- 改掛 輸出入貨物の検査及び鑑定に関する事務。
- 来意尋問掛 入港船舶に臨船し、要件尋問に関する事務。
- 御船掛 船舶の製造、修繕、使用及びその監督に関する事務。
- その他 御武器掛、御馬掛、翻訳方、通詞



開港初期の横浜港 配置図



この点では、のちに明治維新の中核となる勤皇の志士たちのほうが、当時
はきわめて保守的であった。尊皇攘夷思想を信奉する志士たちの多くは、外
国を追い払うことばかりを考え、長州や薩摩は一八六三年の時点でまだ外国
船と交戦し、手痛い目に遭っていた。このことを考えると、明治以降の近代
化の基礎は、むしろ徳川幕府の開国論者たちが準備したとさえいえる。

ところが、ここにひとつの歴史的な偶然が起こった。老中の阿部正弘が三
九歳の若さで急死したのである。その死を聞いたハリスは、「日本のリベラル
派にとっての大きな損失だ」と嘆いたといわれる。さらに大きな障害は、阿
部に代り実権を掌握したが、井伊直弼だったことである。

安政の大獄の立役者である井伊は、幕府内における開国派の活躍を好まし
く思っていなかった。そのため、神奈川の開港案をくつがえし、半ば強引と
もいえる方法で横浜の地を開港場に指定したのである。なぜなら、当時の神
奈川は東海道重要な宿駅であったのに対し、横浜はろくに道も通じていな
い海辺の一寒村に過ぎなかったからである。

こうして、わずか一〇〇戸に満たない半農半漁の静かな村であった横浜村
は、突如、日本史の大舞台にクロージアアップされた。

◆横浜における港町の建設

神奈川が横浜が、ハリスと日本側との交渉は、その後、難航をきわめた。
あくまでも当初の約束通り、神奈川の開港を迫るハリスに対し、日本側は横
浜も神奈川の一部であると主張し、譲らなかつた。

そのため、場所の決定は最後まで持ち越すことになったが、その間にも日
本側は横浜村の住民をすべて本村（現在の元町付近）へと移住させ、海岸の
北側では波止場の建設に着手した。また、江戸や横浜の商人たちを誘致し、
着々と港町・横浜をつくり上げていったのである。

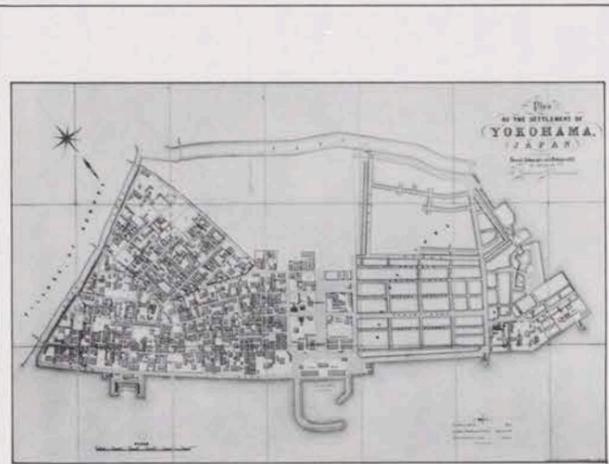
これを見たハリスは、「日本は開港場ではなく、出島をつくらうとしている」と
と看破した。のちの町づくりを見ると、たしかに井伊大老指導型の日本側には、
横浜を出島にし、外国人との接触をそこに封じ込めようとした意図が見え
る。その典型は、横浜村の東側に堀川を掘削し、南側の水路と結んで完全
に横浜の地を内陸と切り離したことである。堀川には谷戸橋、前田橋、西の
橋、南水路に吉田橋の四つの橋を掛け、それぞれに閘所を設けた。その閘所
の内側（海側）が、いまま地名に残る関内（かんない）である。さらに、神
奈川奉行所などの官庁は、関外である戸部村に建設し、役人たちは毎日、馬
で関内の役所に通う形をとった。

の火災がきっかけとなり、本格的な町づくりが始まったからである。外国人
居留地では、それまで土地の配分をめぐる、英・米・仏・蘭などのほかにポ
ルトガル、スイス、プロシアも加わった交渉が続いていたが、この時に「第
三回地所規則」がまとめられた。これによって、運上所などのある中心街に、
中央大通り（現在の日本大通り）を建設し、南側には日本人街と居留地との
緩衝地帯として公園を造成することが決定した。現在の関内地区の都市計画
が、この時に定まったのである。

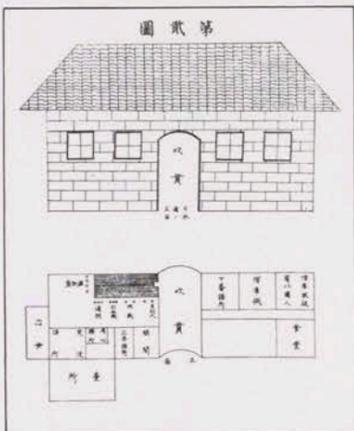
また、横浜運上所は、ほぼ同じ位置に再建されたが、機能を分離し、運上
所のほかに横浜役所の建設が行われた。この第二次運上所と横浜役所とは、
いずれも洋風建築であった。これは、東京の築地ホテルなどに先行し、わが
国の官公庁建築物としては最初の洋風建築物である。

このうちの横浜役所については、写真資料なども比較的残っている。寄棟
屋根の上に塔屋を持つ木造二階建ての建物で、二階の周囲にはベランダがあ
り、外壁石張りのいかにも洋風という感じのする建築物である。ところが、
同時期に建設された第二次横浜運上所に関しては、その建築的な側面がほと
んど知られていない。

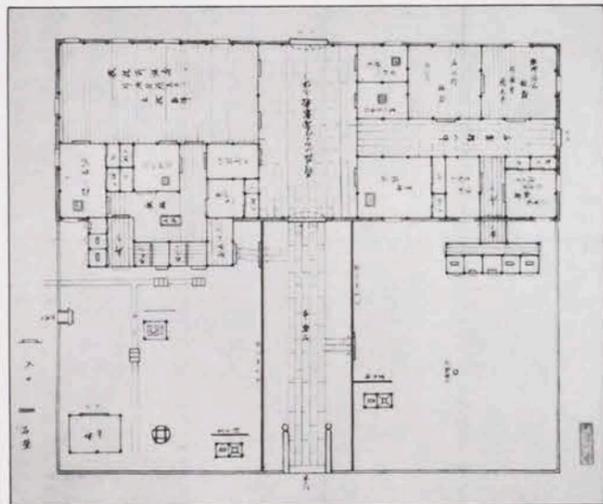
そこでわれわれプロジェクトチームは、初期横浜港の中心的施設であり、



「PLAN OF THE SETTLEMENT OF YOKOHAMA」(神奈川県立文化資料館所蔵)



「横浜税関沿革」(明治35年刊)より横浜運上所図(横浜開港資料館所蔵)



横浜運上所図(神奈川県立金沢文庫所蔵)

こうして、一八五九年（安政六年）の六月二日、横浜はいよいよ開港の運
びとなった。町の中央に運上所が建設され、その前の海には東西二本の波止
場が築造された。東波止場は外国貿易用、西波止場は内国貨物用である。波
止場の規模については、「国事記」が、「海岸之築出し候間数長さ六拾間、巾拾
間の石垣にて、水上壹丈三尺、此上へ芝土手高さ五尺」と記している。二本
の波止場の付根には、荷物検査を行うための改所が設けられた。

また、運上所を中心として、西側は日本人街、東側は外国人居留地と定め
られた。南側には新田が開け、その中には遊廓（港崎町）まで建設されてい
る。さらに、交通の便に対処するため、神奈川と戸部を結ぶ横浜道を開くな
ど、日本側の姿勢は万全であった。

(2) 横浜運上所の復元

◆横浜運上所の機能と機構

横浜運上所は、港町・横浜を象徴する中心施設であった。運上所とは、狹
義には税関の意味だが、横浜においては外国艦船の入出港管理、貿易、洋銀
引換を始めとした外交事務のすべてを取り扱う機関であった。これを統括す
る神奈川奉行所には、総員八九名の支配向（定役以上の役人）がいたが、そ
のうちの五四名が運上所勤務であったことから見ても、運上所の機能がいか
に重要なものであったかを知ることができる。

横浜開港と同時に開設されたこの最初の運上所は、当時の絵図などを見る
と、波板塀柵矢来をめぐらせた木造平屋一部二階建ての純日本式建物であつ
た。仮屋敷であつたともいわれるが、おそらくは横浜開港の際の事務取り扱
いに間に合わせるためと、町の中心をなす建物の必要性から、とりあえず建
設されたものであろう。この運上所は、一八六六年（慶応二年）に起きた、
俗に豚屋火事といわれる火災によって焼失した。運上所のみならず、日本人
街の大半と外国人居留地の一部が焼け、これによって、創建当時の横浜の姿
の大半は失われたのである。

しかし、豚屋火事は、横浜の都市計画の上では大きな役割を果たした。こ
の復元の可能性を探ることにした。

◆復元のプロセスと構想の概要

われわれの作業は、まず開港から明治期にいたるまでの、初期横浜に関す
る資料の調査と収集から始まった。江戸にもっとも近い国際貿易港であつた
だけに、当時の様子を描写した錦絵はかなりの数にのぼる。収集した資料を年
代順に整理するだけでも、相当の時間を要したが、それらを並べてみると、
横浜開港の建設作業も、また火災後の再建作業も驚異的なスピードで進めら
れたことが分かった。日米修好通商条約が結ばれたのは一八五八年のことだ
が、その年のうちに波止場の建設が行われ、翌年には運上所を始めとした官
舎も完成し、開港に間に合わせている。また、豚屋火事あとの復興につい
ても、居留地の外国人が、「三日後にはもう再建作業が始まっていた」と驚き
の言葉を書き残しているほどであり、現在にも通じる日本人の民族性を見る
思いであった。

こうして多数の資料を収集、整理し、往時の雰囲気についてはかなり知る

ことができた。しかし、建築的な視点から見ると、スケールの正確な資料はきわめて稀であった。たとえば開港当初のものに、五雲亭貞秀が描いた『神奈川港御貿易場御開地』や、一川芳貞の筆になる『御開港横浜之圖』があるが、いずれも概念図であってスケールの正確さは望むことができない。横浜は、豚屋火事だけでなく、関東大震災や第二次大戦でも壊滅的な被害を受けており、正式な図面はほとんど残っていない状況であった。

そうした中で、われわれの目をひいたのは、一八六五年（慶応元年）に仏蘭西ミニストルの命によりクリベットが実測作成したと記されている『横浜絵図面』であった。これは、豚屋火事直前の横浜をかなり正確に描いたものといえる。また、明治三年に日本政府の要請によって外国人が作成した『PLAN OF SETTLEMENT OF YOKOHAMA』という絵図も発見された。これは、火事の四年後のものである。

特に後者の絵図には、運上所を始めとした中心街の建物の位置や敷地、さらに日本人街や居留地の町割りや詳細に描かれている。横浜全体のスケールに関しては、これらからある程度正確な把握が可能であると考えた。また波止場の形状についても、当初は二本の直線状であったものが、火災後は旧東波止場が手釣状に大きく伸び、旧西波止場も内側に湾曲した形に変化していることが分かった。

そこで、横浜の中心であった運上所などの建物について、さらに調査していくと、建築的な資料としては神奈川県立金沢文庫から『横浜運上所絵図』、また横浜開港資料館からは『SKETCH OF PROPOSED DWELLING HOUSE ON LOT NO.1 YOKOHAMA FOR MESS. JARDINE MATHESON Co.』の図面を見つけたことができた。前者は、文字通り横浜運上所の平面図、後者は東洋において絶大な勢力を誇っていたイギリスのジャーデン・マッソン商会の英一番館である。

このうちの『横浜運上所絵図』の平面図を、前述した二葉の絵図に照らし合わせてみると、驚いたことに、『PLAN OF SETTLEMENT OF YOKOHAMA』に描かれた横浜運上所の敷地にピッタリと合致した。つまり、平面図にある建物及び石堀で囲まれた中庭の形状が、そのまま小さくなって絵図面に表現されていたのである。つまり、『横浜運上所絵図』は火災後の運上所であり、それをわれわれの求める最初の洋風建築の横浜運上所であることが判明した。

さらに作業を一步進め、『PLAN OF SETTLEMENT OF YOKOHAMA』の絵図に示された建物の位置と、われわれが収集した錦絵や写真から読み取れる情報とを、一つひとつ照合してみることにした。すると運上所だけでなく、二本の塔を持つ特徴的なイギリス領事館や、アメリカ領事館、運上所と一緒に建設された横浜役所などの中心的な建物の配置や向きなどが、かなり正確に把握できることが分かったのである。

ここにおいて、プロジェクトチームの復元構想は大きく広がった。つまり、第二次横浜運上所を中心として、当時の横浜のメインストリートの町並を、波止場も含めてできる限り復元してみようという思いがふくらんできたのである。その作業の結果が、四ページにある『復元配置図』である。

◆横浜運上所の復元

第二次横浜運上所については、次のような復元作業を行った。まず、神奈川県立金沢文庫から入手した『横浜運上所絵図』について、詳細な検討を加えた。

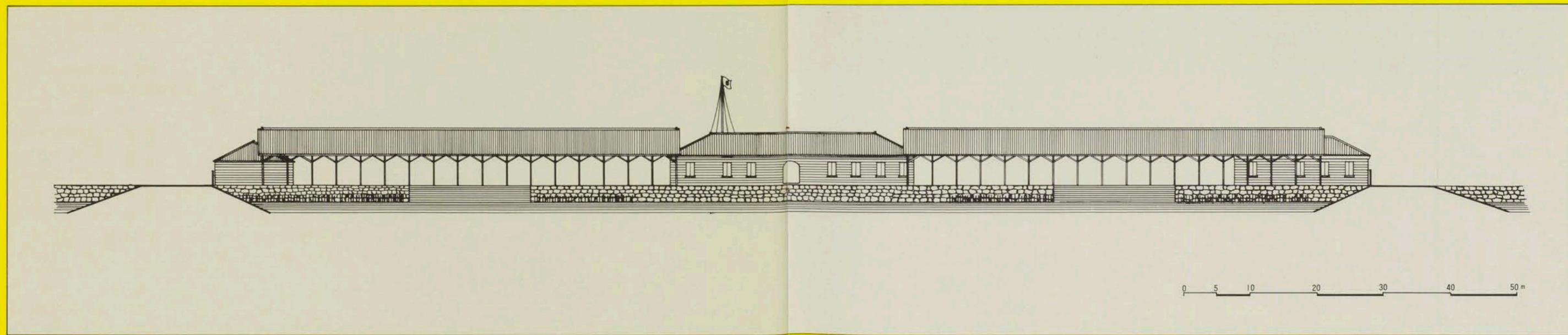
絵図の左下には、建築の間口部及び壁の種類を示す凡例が示されていた。入口、窓などは同じ形で描かれているが、窓は朱色になっている。また、車形といって、朱色の点線で表示されているのは、出入口の吹抜のアーチである。石壁は、薄墨の入った二本線で、これは運上所の外壁を示している。石堀は幅の狭い二本線で、これが中央大通りに面した庭を囲んだ外堀にあたる。さらに墨書きの図面の内側（建物内部）に目を転じると、押入れ、戸棚、小遣い部屋などの戸は、われわれが現在も使用しているのと同じ表現で、引違い戸を示している。下屋部分の後架（便所）は、小便所部分には戸がなく、大便所部分は片開き戸の表示となっている。

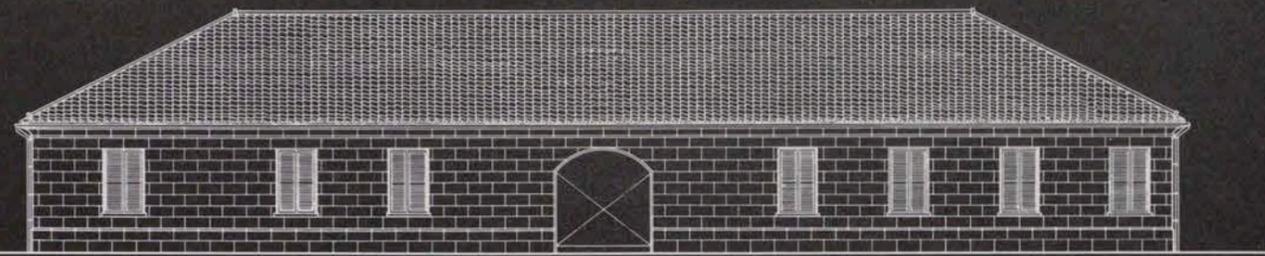
以上のことから、引戸の部分はかならず引戸の表示がなされていることが分かった。そこで、凡例にある入口及び窓の片側に張り出した白抜き表現は開き戸（両開き、または片開き）を示したものと判断し、その開き方向を出張らせた方向で表していると考えることにした。「目利人詰所」「常人足詰所」などの開き戸には、不可解な点もあるが、混乱期にはあり得たという判断から同じ考えで統一した。

また、主な部屋には、たとえば「収税所、板敷、廻り張り付、鏡天井、三拾貳坪」とか、「荷改所、石床、貳拾八坪」「引合所、板敷、廻り張り付、鏡天井」などの記入があり、内部仕上げの一部や部屋面積が分かる。記入のない「役々控所」などは、畳敷とした。

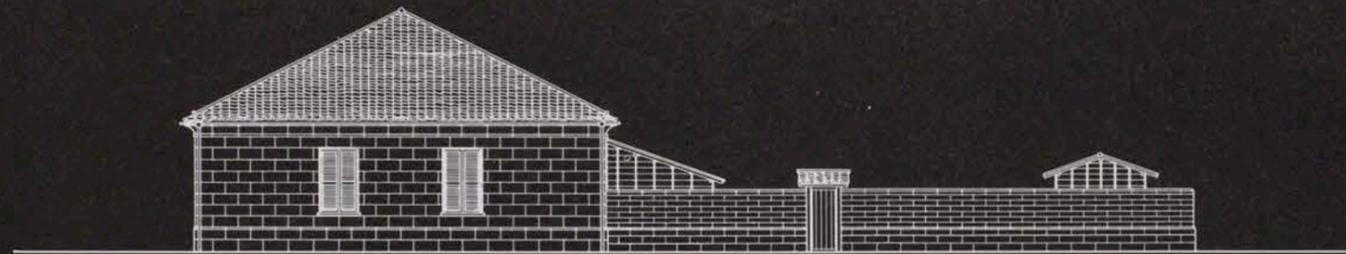
建物のスケールに関しては、図面上の柱間は約十一・五、間隔で表現されている。これがどういう基準の縮尺であるか不明だが、「収税所」や「荷改所」

運上所外観図（西波止場突堤より臨む）

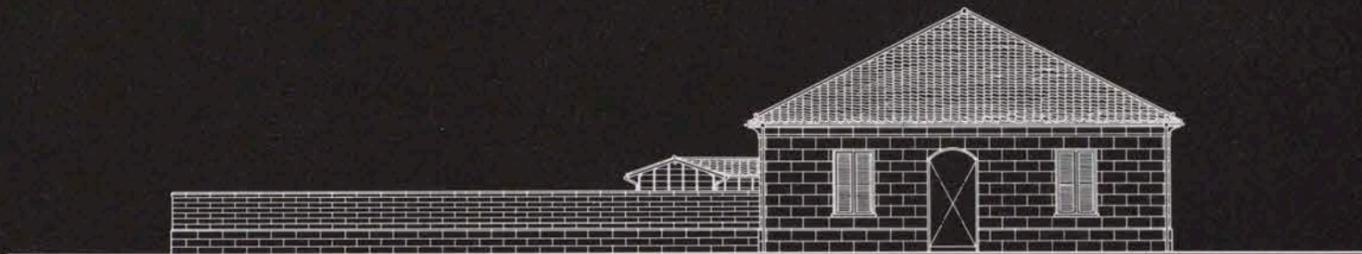




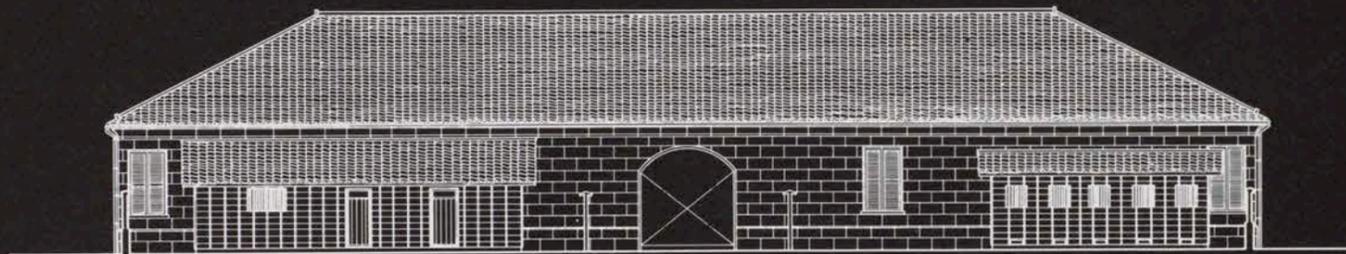
北側立面図(波止場側)



西側立面図



東側立面図

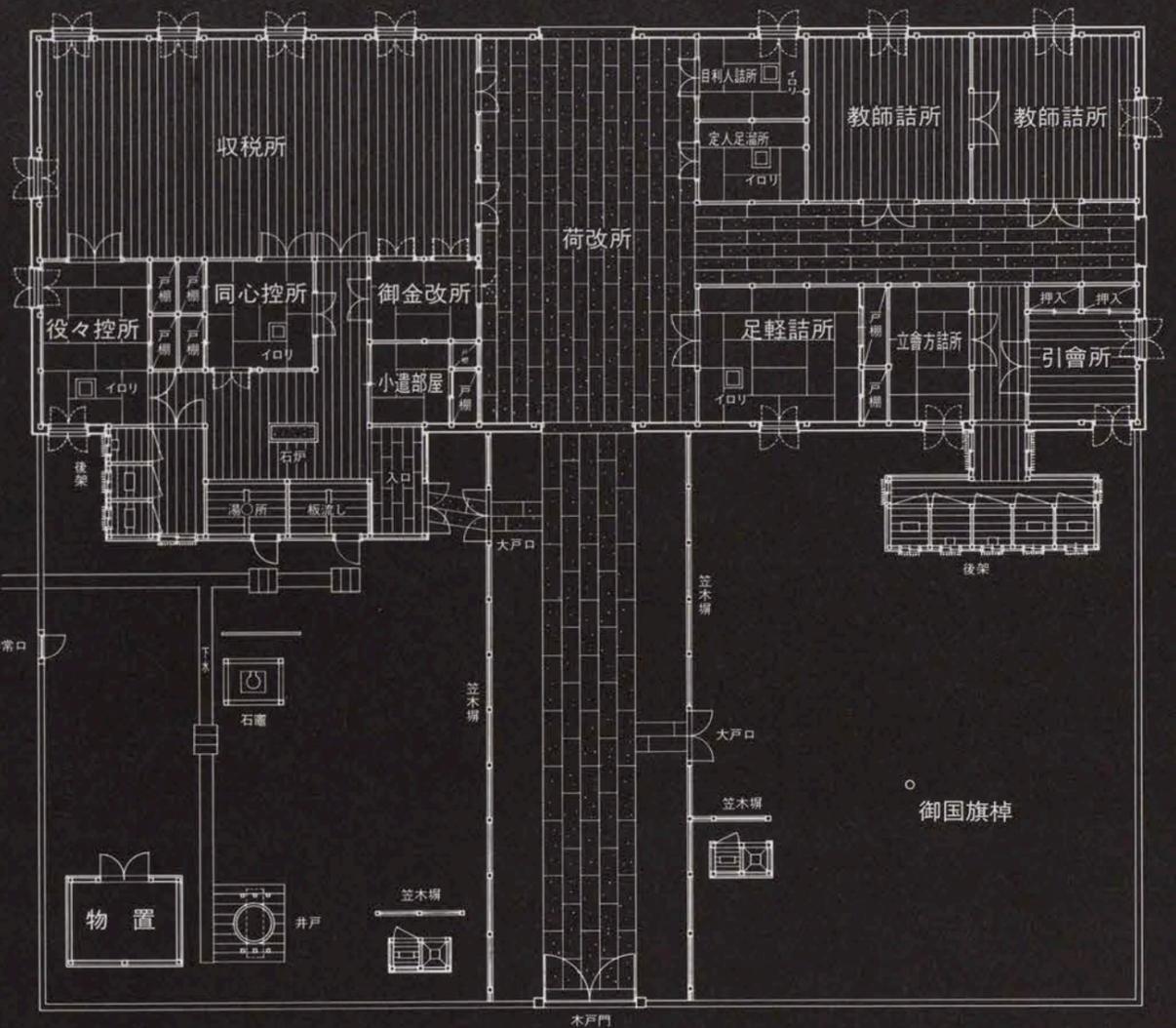


南側立面図(中庭側)



南側立面図(日本大通り側)

0 1 2 3 4 5 10m



平面图

0 1 2 3 4 5 10m

の坪数から判断して、前者は四間×八間、後者は四間×七間と断定し、図面上の標準的な柱間隔を田舎間一間として復元した。

以上のように、横浜運上所の平面については、絵図を基にして復元することができたが、問題は立面であった。立面の参考資料としては、『横浜税関沿革』に明治二十五年のスケッチが掲載されている。しかし、これはまったくの素人が、おそらくは記憶に基づいてのちに描いたものであり、図面的な正確さの点では全く期待できなかった。次に、明治三年の二代広重画の『武陽横濱一覽』の鳥瞰図の波止場付近を写真で拡大してみたところ、運上所及び荷揚げ場の上屋が見えている。これによれば、運上所の出入口はたしかに吹抜のアーチであり、荷揚げ場の上屋の木造トラスがかつて『季刊大林』で復元した新橋駅プラットホームの上屋と同じ形であることが分かった。しかし、これでは上屋のほんの一部が判明したに過ぎない。

そこでわれわれはもう一度、素人が描いたと思われるスケッチに立ち戻った。建築的なスケールの点では信頼性に乏しいが、このスケッチからできる限りの情報を読み取ることにした。まず第一に、屋根形状が寄棟であり、棧瓦葺であったことが分かる。また、屋根部分が大きく表現されており、素人の目にも地上から屋根が割合目立つ勾配であったことが想像される。軒の出はやや小さく、外壁はわりと小割りの石の馬目地張りとなっている。出入口のアーチは、平面図の表現と照合しても、ある高さまで垂直に直線を上り、その上に架けられたアーチである。窓の形状は、アーチなしの四角形で、比較的高い位置に付いていた印象だったのであろう。

スケッチから以上のことは判断できたが、やはり一番の課題は、屋根勾配や軒高などの正確なスケールをどこから求めるか、である。そこでまず、平面図の寸法と当時の類似建物の写真から作成した透視スケッチを基に、コンピュータを使って透視図法の逆算をすることにより屋根勾配や軒高を求める方法を試みた(『季刊大林』の国会議事堂の復元で利用した手法である)。しかし、これは写真資料と、平面図の位置とズレがあるため、不可能であることが分かった。

次に試みたのは、一八六七年(慶応三年)に撮影された横浜役所の写真を利用する方法である。この写真の右端には倉庫状の建物が写っているが、横浜役所と運上所とは同時に建設されたものであり、したがって同じ公共施設としてこの倉庫の屋根勾配や軒高が運上所と同一であろうと想定した。そして、写真の塀際に立っている人物の身長を一・六メートルと仮定し、比例によって建物の各部の数値を算出したところ、塀高一・四、窓上部高三・四、軒高四のある資料が作成できるのではないかと、という思いがつのつてきた。

そこでわれわれは、『安政六年(文久二年)横浜商人録』を主に、『安政六年末年七月改御交易場所併諸商人軒数明細書』を参考にし、各店の商売の内容と間口奥行の間数を、一軒一軒について克明に記入していく作業に取りかかった。ひと口に商売の内容といっても、混乱期の横浜だけに単純なものではなく、いわゆる「なんでも屋」が多い。極端な例では、大通り北側の中川屋徳二郎の店のように、「末二月二十日、薪、水、食料」「末四月十六日、小鳥飼鳥、ちん、髪結床」「末九月十一日、太物、小間物、荒物、銅鉄、唐銅、ハシダ、牛肉切売」「末十一月二十六日、生絹糸、桐油」「末十二月廿五日、湯屋」と、啞然とするものもある。これを整理するため、「最初に登録した職種を記入する」という方法を採用した。また、参考にした二つの資料には記入方法に不備な点もあり、解釈によって町割りそのものが異なってくる所が少なくない。今回は、まず間口奥行の間数をつぶさに記入しながら、間数の合計が合うように割り直し、洲千町の町割りについても追加することにした。

こうして完成した町割り図を、さらに商売別に色分けしてみると、開港期の町の特徴が見えてきた。それは商売の内容別による町並の構成である。たとえば、運送・人足関係を取扱う店は波止場、運上所近くの海岸通りに集中している。物産店もこの付近に多い。塗物・漆器類の店は本町五丁目付近に、現在の総合商社的な店は本町二丁目、四丁目のメインストリートを占めていることが分かる。また、さまざまな職種の店が混在しているのは、南仲通り二丁目、弁天通り二丁目、五丁目である。一方髪結や医師の店は、日本人街の全体にはほぼ等間隔で散在しており、町並の計画性にはなるほどと思わせるものがあった。

横浜といえば生糸貿易が有名だが、この町割り図には生糸を取扱う店は意外作業を終えて、横浜港がテーマとなった時、その範囲はあまりにも広く、対象をどう絞り込むかに正直なところ戸惑いを覚えた。しかし、資料調査を進めるうちに、戸惑いは急速に興味に変わり、さらに興奮さえ覚え始めた。絵図面や錦絵などの収集した資料のすべてを、色分けしたラシヤ紙に年代別に貼り付け、毎日のように眺めるうち、開港初期の横浜の姿が少しずつイメージされ、そのターゲットも絞られてきたからである。横浜は、波止場と運上所を中心として、日本人街と居留地とを東西に振り分けた「計画都市」であり、それは現在の関内にも生きており、時間を越えたそのドラマチックな展

びという寸法を得た。

屋根勾配は、一八八六年(明治十九年)に横浜で出版された『日本絵入商人録』の銅版画の商館などの勾配を参考としつつ、さらに横浜役所や英国領事館背後の運上所倉庫なども比較し、五寸勾配とした。また、外観の下屋部分は、平面図から木造板張りであることが分かる。そこで、一八七〇年(明治三年)に三代広重が描いた『横浜運上所絵圖』を参考として、下見板張りの窓は格子子付の障子窓とした。外壁や石塀の石割りについては、当時のほかの建物の写真や錦絵、銅版画などを詳細に検討して決定する方法をとり、門柱、門扉も同様の方法を採用した。

こうして第二次横浜運上所の復元が成った。あらためてその復元図を見ると、大火後の再建だけに、構造は木造であっても屋根は瓦葺、外壁は石張りであり、さすがに防火対策が施されている。これは、第三回地所規則によつて、諸外国から中心街の役所を防火構造とする要請があり、それを受けたものであった。また、この運上所は、横浜役所とともに、神奈川役所常式請負人・河井松右衛門が請負い、一八六七年(慶応三年)、維新の直前に完成している。ペランダや塔のある木造二階建ての横浜役所と比較すると、運上所は一見、地味である。しかし、波止場から日本大通りへと抜ける中央部のアーチ型の通り抜けホールや、従来の日本建築とは全く異なる洋式平面の採用など、欧米建築の導入という点では、幕末期を代表する画期的な建物である。

さらに、運上所の左右両翼にある荷揚げ場の上屋の木構造も、方杖を用いた斬新な手法であり、のちに新橋駅のプラットホームの上屋の構造にも取り入れられるなど、運上所の建築は、すべてに時代の最先端をいくものであった。

(3)開港期・日本人街の町割り図の改訂復元(添付地図参照)

以上のような方法により、横浜運上所を中心としたメインストリートの町並の復元を行ったが、その作業過程で、われわれはもう一つの興味深い資料と出会った。それは、『横浜市史』第二巻に添付されている『安政六年現在横浜町商人配置圖』である。これは、開港期の横浜の日本人街における町割り再現実したもので、『安政六年(文久二年)横浜商人録』や当時の町割り絵図などを参考として作成された大変な力作である。

この配置図と、五雲亭貞秀の『横浜開港見聞誌』や『横浜土産』(万延元年)に描かれた町の風景とを照合しながら眺めると、さながら往時の横浜を歩いているかのような錯覚と興奮を覚えた。そこで、この配置図を基礎として、さらにどの店がどのような商売をしていたのかを書き込むと、一層臨場感に少ない。それは、開港期には外国商人たちの関心が生糸よりも金貨という特殊な投機商品に向いていたからである。当時のわが国の金銀比価が、国際水準の三分の一という低さだったことによる。しかし、生糸はこの直後から急速に輸出品の代表となり、とくに生糸の原産地を背景とした地方商人たちの台頭によって、横浜の貿易はドラマチックな様相を呈してきているのである。

ところで、貞秀の絵に描かれた店の名と、町割り図の店名を照合しながら見ていくと、非常によく合致していることが理解できるであろう。海岸通り入口の伊勢屋の暖簾と金子屋の名称の不一致、また本町南横通り方向を見た絵の高木屋塗物店が町割り図では一軒入った山城屋の隣になっていることを除けば、あとは実に正確である。本町一丁目大通りを見た絵には、左側の東国屋(陸鳥屋)の店先に鳥籠を描くなど、貞秀の配慮には心にくいものを感じられる。

ちなみに、有名な大店の三井の横浜店は本町一丁目と二丁目の角にあり、岡倉天心の生まれた石川屋は本町五丁目の角にある。また、本町四丁目の中居屋重兵衛は、総銅板屋根の華麗な店を建てて幕府に生まれ、命を落とした代表的な横浜商人のひとりであった。海岸通り二丁目の下田屋文吉は、のちに同じ場所に横浜最初の芝居小屋である下田座を興している。さらに、運上所西側の脇通り(本町北通り)を南へ行くと、吉田新田の中に有名な港崎遊廓があり、反対に本町一丁目の福井屋の角を西へ行くと、その突当たりが開港以前から洲千の弁天社があり、その裏の浜は馬場になっていた。余談になるが、現在の当社横浜支店は、弁天通り四丁目粉屋を営む鴨井屋重兵衛の店の位置になる。こうした現代との比較も、その変わりようを知る意味で興味深いものがある。

開には興味の尽きないものがあった。とくに、横浜運上所のように、かつては横浜の先進的建築物でありながら、その単純明快さのゆえに歴史の蔭に埋もれようとしていたものに出会えたことは、建築に携わる者として大きな喜びであった。今回の復元が、横浜の歴史と、洋風建築の歴史を知る上での一助となれば幸いである。

なお最後となったが、今回の復元に際し、建築面での監修を担当いただいた平井聖東京工業大学教授、各種資料を提供していただいた横浜開港資料館及び同館堀勇良先生に心から感謝の意を表したい。

安政六年 文久二年 横浜商人録による 「横浜港日本人街の想定町割図」

大林組プロジェクトチーム編
『季刊大林 No.24 港』 12~13頁参考地図



① 1から港船方向を臨む



② 2から西迄止場方向を臨む



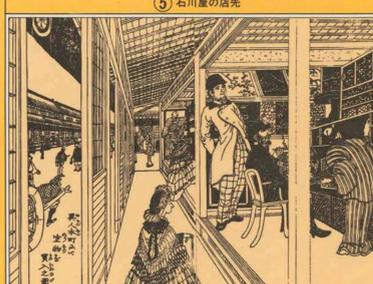
③ 3から外国人居住地を臨む



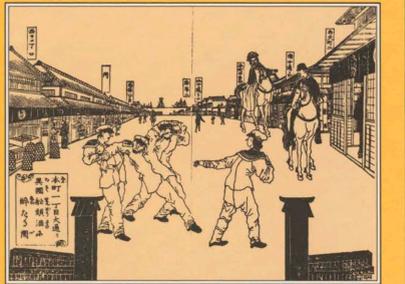
④ 4から上南門



⑤ 5石川屋の店先



⑥ 6黒江屋の店内



⑦ 7から港船方向を臨む



⑧ 8から弁天社を臨む



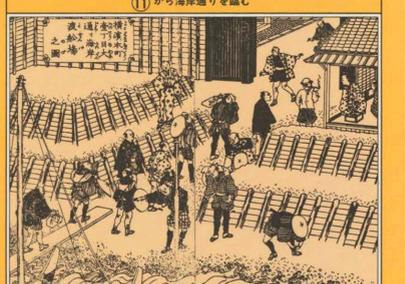
⑨ 9から本町通りを臨む



⑩ 10三井の店内



⑪ 11から海岸通りを臨む



⑫ 12渡船場



町會所 高札所

運上所

至西迄止場

至港船道

至外国人居住地

本町五丁目

本町四丁目

本町三丁目

本町二丁目(電報舎側)

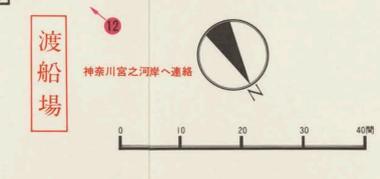
本町一丁目(道幅拾圓)

至西迄止場

至港船道

至外国人居住地

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| 製紙 | 製糖 | 製粉 | 製油 | 製炭 | 製鉄 | 製鋼 | 製銅 | 製鉛 | 製鋅 | 製銀 | 製金 | 製硝 | 製塩 | 製糖 | 製粉 | 製油 | 製炭 | 製鉄 | 製鋼 | 製銅 | 製鉛 | 製鋅 | 製銀 | 製金 | 製硝 | 製塩 |
| 製糖 | 製粉 | 製油 | 製炭 | 製鉄 | 製鋼 | 製銅 | 製鉛 | 製鋅 | 製銀 | 製金 | 製硝 | 製塩 | 製糖 | 製粉 | 製油 | 製炭 | 製鉄 | 製鋼 | 製銅 | 製鉛 | 製鋅 | 製銀 | 製金 | 製硝 | 製塩 | |
| 製糖 | 製粉 | 製油 | 製炭 | 製鉄 | 製鋼 | 製銅 | 製鉛 | 製鋅 | 製銀 | 製金 | 製硝 | 製塩 | 製糖 | 製粉 | 製油 | 製炭 | 製鉄 | 製鋼 | 製銅 | 製鉛 | 製鋅 | 製銀 | 製金 | 製硝 | 製塩 | |



参考資料
『横浜開港見聞録』文久二年、五箇年庚申(横浜編)
『開港横浜正景』文久三年、錦港堂版
『安政六年七月改 御文書場所附、諸商人軒数明細書』
『安政六年現在横浜町 住商人配置圖』横浜市史第2巻